成　果　報　告　書

【H30 年度教育改革推進事業経費】

所属部局	システム工学部	代表者氏名	曽我真人
事項名	演劇的手法をとりいれたアクティブ・ラーニングによる英語学習法の開発と実践		
当初計画に対する目標達成率	100　%	事業の終了時期	平成　３１　年　３　月
予算配分総額	338,000　円	経費使用総額	331,540　円

【事業の成果】※具体的に記入してください。

科学技術英語Aの授業において，ビジネス英語を内容とした授業を前半の10回の授業時間を使って行った後，後半の4回の授業時間を使ってPBL形式のアクティブラーニングを行った．具体的には，4人1組でグループを形成し，グループ毎にオリジナルの英会話文を創作した．その際に，具体的に以下のように仕様を決め，始めに伝達した．

(1)　話者の数（登場人物の数）はグループの構成人数とする．4人グループなら，登場人物は4人となる．

(2)　前半の座学で学習した関係代名詞whatを含む文を，各登場人物の台詞に1文ずつ含むように会話文を創作すること（これは必須条件）．また，前半の座学で学んだその他の表現をある程度盛り込むことが望ましい（これは努力目標）．

(3)　発表会では，グループの構成人数の登場人物に，役を割り振って，英会話としてプレゼンする．

(4)　各人が，少なくとも，4回の発言をするように，会話文を作成すること．つまり，各人が４回発言すると，4人×4回＝16となり，16回のやりとりがある会話文となる．ただし，授業時間の都合上，最大は各人10回までとする．

(5)　プレゼン時間は，最長で5分以内とすること．

(6)　評価は，作文の内容（文法の正しさ，内容の面白さ，内容をよく練っているかどうか，内容やwhat節を含む文のオリジナリティ）と，発表会の英会話の良さ（発音，イントネーションなど），で評価を行う．

(7)　文法ミスを減らすために短い会話文とするよりは，プレゼン制限時間5分以内であれば，文法ミスが多少多くても，長い会話文を作成したグループの努力を評価する．

(8)　発表は，PPTを見ながらしゃべっても良いが，なるべく暗記することが望ましい．

(9)　会話文の最後にオチがある面白い内容や，ジェスチャを交えての演技力も評価する．

このうち，(2)の条件として，関係代名詞whatを用いて会話文を作成させている理由は，ひとつは，関係代名詞whatは応用が比較的難しい文法事項であることから，それを実践で使えるような応用力を身につけてほしいという願いから，このALの学習目標のひとつにしているためである．もうひとつは，このような制約条件を課すことにより，Webサイトなどからの会話文の盗作を防ぎ，会話文を学生たち自ら考えて，英作文を行わせる狙いがある．

後半の4回の授業枠のうち，最初の2回はグループワークとして英会話文の創作時間に充て，合計16班を8班ずつ残り２回の授業に分けて，演劇形式で発表会を行った．具体的には，英会話文を記載したPPTファイルをスクリーンに投影しながら，グループのメンバーが教卓付近のスペースで演劇仕立てで演じながら発表するというものである．

発表者以外は，配布した相互評価シートに発表を視聴しながら評価を回答する．相互評価シートは，内容の面白さ，文法単語の正しさを5段階で評価させ，各日ごとに，良かった発表を3つ以内で○，特に良かった発表に◎をつけさせた．

さらに，事後に，教室後方から撮影した発表の様子を各班毎にMoodle上の授業ページにアップロードし，感想書き込み欄を用意して，感想を書き込ませ，振り返りによる相互評価を行った．

16班のうち，特に内容が面白く，かつ，演技力も高かった発表が4件あった．そのうち，図1は桃太郎の話を改変したストーリーで，はちまき，財布，黍団子袋などの小道具を用意し，桃太郎役はジェスチャも豊富に，ほとんどPPTを見ずに演じきった．

最終日の発表会終了後に無記名アンケートを行った．このALの良かった点についての回答例としては，「自分で学んだ文法を使った文章を考えて発表できる．」，「自分の言いたいこと，表現を英語で表現する機会になった．口語的な言い回しのような英語を知るきっかけになった．」，「講義を聞いているだけだと身につきにくい，つまらなくなってくることもあるので，自ら何かをするのは良い．それを発表することになるのでさぼろうと思わなくなる．」，「色々な言い回しについて自ら調べることになるので，英語の勉強になった．テストだけで成績評価されることがとても不平等と思っているのでグループワークでも評価の割合を増やしてほしい」などがあった．

一方，悪かった点についての回答例としては，「グループ内の個人の差が生じやすく，とても大変な思いをする人が必ず出るので個々を見る指標が必要だと思う．」，「次の班による質疑応答入れてもいいかも」，「moodleでの評価を非公開(他の受講者には見えない)にしてほしい。」などがあった．事後アンケートで，肯定的な意見が多かったことから，このALは成功であったといえる．

【当初計画段階との対比】※上記目標達成率を判断した理由等

当初から，前記の「事業の成果」に記述した内容を計画しており，そのとおりに実行し，アンケート調査により，学生の反応を調査したところ，満足感が得られていることが明らかになったので，達成率を100％とした．また，当初の予定通り，成果をUeLA&JADEのシンポジウムにて対外発表している．

【今後の展望等】

○本事業の発展性

　このPBLの枠組みは，一般化すると，前半の授業10回分を使って，基礎知識を学習し，後半の4回分を使って，前半で学んだ基礎知識の応用方法を自ら考えて学習していることになる．したがって，この枠組みは英語学習だけでなく，広く，様々な科目にも応用可能であると考えられ，発展性があるといえる．

○改善すべき事項

　グループワークによるPBLで常に問題となるのが，学生個人の評価である．グループとしての評価は容易であるが，グループワークを行っているときの，各個人の貢献度を測定するのが難しい．これは，今後の課題である．また，グループワークとしての演劇風での英会話の登壇発表時には，その様子をビデオに録画し，後ほど，それを見ながらルーブリック評価を行った．そのビデオには，学生の顔は明瞭に映っていたのだが，私の記憶上，学生の顔と名前の対応がとれるのは一部の学生に限られるため，ビデオを利用して，学生の個々の発表点をつけることができたのは，一部の学生に限られてしまった．来年度からは，役の名札を学生につけてもらい，役と実名の対応関係を提出されるPPTに記載させることにより，ビデオを再生すれば，学生の氏名がわかるようにすれば，ビデオを見ながらルーブリック評価を行うことが可能になるので，そのようにしたいと考えている．

○大型の競争的資金等（COE、GP等）への申請実績及び今後の予定

大型ではないが，科研費の挑戦的研究（萌芽）に応募中である．

○その他特筆すべき事項

和歌山大学は，アクティブラーニングが盛んな大学であり，協働教育センタ（クリエ）もPBLで先進的な実績がある．もし，和歌山大学がPBL拠点を目指すのであれば，この教育改革プロジェクトの実践も，その一端を担うことができると思う．